高橋和巳
作品集 別巻

高橋和巳作品集

別巻

河出書房新社

高橋和巳作品集別巻　詩人の運命　©1972

1972年4月28日初版発行
1973年10月25日再版発行

著　者　高橋和巳
装幀者　粟津　潔
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平

定価は函・帯にあります。

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3-6
電話　東京　292-3711(大代表)
振替　東京　10802

印刷・中央精版印刷　製本・小高製本

高橋和巳作品集　別巻

詩人の運命　7

解題――作品成立まで　317

索引　319

高橋和巳年譜　329

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

高橋和巳作品集 別巻

詩人の運命

——李商隱詩論

第一章

人は知識を避けて生きること能わず、かつ、生れながらにして知らんと欲するのが人間の運命であるなら、人間の知識にはすでに不可避的に知ることへの〈態度〉が含まれている。そして一切の人間的事態におけるこの態度の不可避的先行は、詩的表現の場においても妥当する。

人間精神の文学的表現は、しかし何ものにも還元されぬ個別者の、一種不可言表的な各自の直接性と、自己破壊の危懼ゆえに一時踏みとどまらねばならぬ表言配慮に限界されるゆえに、その態度との直截な相補がつねに見られるとはかぎらない。しかも本質的に、彼の属する共同体――その総体としての社会への問いかけであることから逃れられぬ文学表現は、社会のがわの慣行や価値の序列に対峙しうる絶えざる個我の形相的意識の持続を必要とし、しかも、いったん形相された意識は対現実的流動性よりも自律性をより濃厚に持たねばならぬゆえに、一般の要求あるいは自己の日常性との幸福な相関は、いっそう稀れにしか見ることができない。

生存の形相性とは、ほかならぬ自己自身に与える〈私〉は〈私〉である根源的信憑性を意味し、

少くとも成人の諸行為の決定は、礼儀や道徳的習慣律の普遍的制約ないしは法文や戒律よりも、各自の意識形相の形式による。道徳もこの意識形相にとり入れられた限りにおいて、その人間を規制する。たしかに、享受者のがわからは、雑多な現実の中に一条の法則を見出すべき人間の諸理念活動のなかで、文学はもっとも現実との交流の激しかるべきいわば開放流動思念である。しかし、創造面からみれば、また個人の直観直覚、その者特有の直接性ともっとも不可分に関係するものであるがゆえに、感性領域においてすらもっとも高度な自律性が要求される。繰返していえば、その自律意識は、対他者関係よりも、まず自己に対して現実実践の場に一つの拘束となって作用する。

中晩唐において、その不運の発端は確かに現実から与えられてはいるが、彼らがただ読書人であることにはよらず、彼らが文学を実践的に愛したこと、自己の精神の美的形相の必然に執着し、詩の製作に最高の情熱を燃焼させた、まさにそのことによって自己の現実のあいつづく崩壊をみつめなければならなかった詩人群が確かに存在する。たとえば、李賀（七九〇—八一六）にはいわば明確直截な悲劇として、李商隠（八一二—八五八）の場合には、錯綜した矛盾として、文学にとっては幸福な、人間にとっては不幸な、表現態度と現実的行為との分裂があらわれるのをわれわれは見る。「文は道を載す」べきだという基本的な文学評価の基準とともに、中国における文学者とその文学との関係については、司馬遷（BC一四五—八六）が濁世に清節の士が出現するように、卓越した著述は、人間の悲劇的現実にその根拠を求めうるとした認識が久しい一つの伝統としてあった。魏晉時代の隠逸理念の媒介によって、あるいは劉勰のような平衡的理性によっていくぶん緩和されな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がらも、自己の存在の意義を、今まであったそしてこれからもあるべき世界に問う文学創造は、その個人の、自身の罪ではない悲境に、最大の動因を求めうるという思想は絶えることなく継承されている。事実、周囲の個々人に絶望すればするほど、いっそう人間全体に希望を託さざるを得なかった時代文化の担当者は、ほとんど例外なく未然の知音を待つと叫んでいる。

唐代においても、載道主義者の一人であった柳宗元（七七三―八一九）（始め吾れ幼にして且つ少なるとき文章を爲るに辭を以て工みと爲せり。長ずるに及んで乃わち文は以て道を明かにするを知りぬ。是れ故より苟くも炳炳烺烺、采色に務め、聲音を夸るを爲して以て能と爲さざる也。「韋中立に答えて師道を論ずるの書」）を、韓愈（七六八―八二四）は先述の伝統的立場から批評して次のようにいっている。

「然れども斥けらるる事久しからず、窮する事極まらざれば、人より出ずる有りと雖も、其の文學辭章、必らずや自ら力めて以て、必らず後に傳わるを致すこと、今の疑い無き如くなる能わじ。子厚（柳宗元）をして願う所を得て、一時に將相たらしむと雖も、彼を以て此に易うるは、孰か得にして孰か失なる。必らず能くこれを辨ずる者あらん。」（柳子厚墓誌銘）

しかし、この一文はただよく道を載せているゆえにその文学が永遠であるという常套的称揚であるだけにはとどまらない。また六朝時代の文学評論『詩品』が、卓越した表現をその背後にある詩人の個人的非運との関係において価値づけようとする態度をもっていたことと、[1] 韓愈の、文章の美のためには、一人の人間の不幸はむしろ希ましいことであったとする評価のあいだには、一般的な

文学に寄せる享受者の信頼と創作者の溺愛との程度差によっては説明しきれぬ一つの断層が認められる。この二者の間隔は、一見、人間的責任を後世に委任することを拒否するかにみえる発言、たとえば李白（七〇一―七六二）の、「君は愛す身後の名、我は愛す眼前の酒」よりも、実は、より深い断層である。なぜならちょうど、人間の悲惨の社会的な自意識として人間が創り出したはずの宗教が、倒錯的にその人間を拘束し束縛するように、韓愈の文章には、文学が逆に人間の犠牲を要求するにいたる、あまり問題にされぬ一面が、胚芽のかたちで行間に表現されているからである。(2) 実際に、幸福や栄達を欲求する此岸的人間性と、人間の可能の探求であるゆえにやがては不可能な、非現実な美の憧憬にまで伸長する文学意識の極度の凝集とは、むしろしばしば背反するものである。一時代の文学の栄華はかならずつぎの時代に、こうした一種不可思議な文学的陥穽をかたち造る。李白・杜甫（七一二―七七〇）らの盛唐詩の後塵を拝した李賀や李商隠や杜牧（八〇三―八五二）らの人間像とその詩の把握は、文学の〈問いかけ性〉と同時に、文学の〈自縛性〉の並行検討を抜きにしてはなしえない。正義、理想、節操、自己愛などが社会の不合理に傷つけられ、葬られゆく歎きとは別の、ひとたび美に触れしゆえにあたかも死神に憑かれたように（プラトンの箴言）不運の道をたどる歎きもまた存在する。この無形の詩文に魅せられ、実質的にはなんら頼りにならぬ詩想に内部から呪縛され、現実を拙くしか生きることのできなかった、もう一つの精神の運命が、晩唐の時代には覆いがたく姿をあらわしてくる。「君　樂府を唱うに非ずんば、誰か秋を怨むことの深きを識らむや。」（李賀・巴童　答う）と、それなくしては触れえなかったであろう魂の、自然の美し

い諸相の発見を誇った文学の開花は、その反面においてまた、今までには見られなかった複雑な不幸の形態、悲しみの形態をひと知れず人間界にもたらしたのである。李陵の禍に遭い縲紲に幽せられた司馬遷の言葉を真似ていえば、それは中晩唐詩人たちの罪ではない、そしてまた彼らの罪でもあった。

かつ、確かに唐代文学の一般的隆盛、とくに詩の盛栄をうながした一因といわれる隋朝からの科挙試験の〈詩賦〉試問は、純粋な個人の表現配慮のうえに、社会が形態的配慮を暗々裡に要求し、いっそう、本来その個人の性格と不可分な態度と表現との関係を複雑にしたと思われる。

そのこと一つを取りあげても、盛唐のころには、現実生活の制約となりながらも、文学の制約とは決してなっていなかったこと、そして晩唐期にいたって、かつて杜甫をはじめ秀れた詩人たちが、十全の現実性を背後によこたえて力強く形成した詩の荘厳が、模範たるべき真理として崇拝されつつ、それを崇拝する中晩唐の詩人たちはもはや、詩と現実との相関を一般的には徐々に喪失していったように見えることが重要な問題として浮びあがってくる。それは一体なぜであるか。おそらく晩唐の歴史を精密に掘り下げねばならず、忽卒のうちに結論するわけにはいかないであろう。だがしかし、解答の鍵は彼らの文学する態度のうちにも秘められている。

韓愈を中心としたグループを例にとれば、張籍、李賀、盧仝（？—八三五）、王建、賈島（七七九—八四三）、孟郊（七五一—八一四）、劉叉ら、そのうちとりわけ自我意識の強烈であったらしい李賀、盧仝、賈島らの詩には、すでに極端な文学への偏執がみられる。韓愈の宏富な詩風のもとで、独自

性を獲得するためでもあったろうが、李賀の、「心嘔出して已まんのみ」と母の怒りを買い、賈島の、「僧推月下門」の、推敲の二字におのれを忘れた苦心の逸話は、一字一句ではない、詩的発想全体に憑かれはじめた人間の非人間化をよく示している。彼らに加えられる〈寒・瘦〉ないし〈怪詭〉という印象批評は、人生のための芸術の主張からは当然のことであるけれども、やがて平凡よりはむしろ〈奇〉であることを欲する、それはとりもなおさず人生的には一種のニヒリズムである態度が晩唐詩人群の、少くともその一派、方干、姚合、兪鳧、周賀らに受けつがれたことは無視できない。李商隱もまた、その潮流の中にあった。

豊田穣氏著『唐詩研究』補遺、晩唐詩の考察には、「二句三年にして得、一吟して雙涙流る」（賈島）をはじめ多くの苦吟例が引かれてある。そこには採録されていない苦吟例をいくらか見出しえた私には、あまりに感性的なこれら文人たちの燃えあがる美のヘゲモニーが時として彼らの健康をも焼き傷つけるほどであったことが感得されたけれども、その状態よりも、彼らが苦吟をあえてしたその〈理由〉こそが第一に検討されねばならないと思われる。苦吟血吐のごとき滞渋を詩の中で洩らさずにはおられない心と、すでに彼らの精神にきざされていたいわばイッヒ・ロマニッシュなアポリヤとの関係いかん、もしくは、存在せぬ美の拷問を恍惚として甘受する者に往々にして現われる奇行と、魏晉の清談家あるいは隱逸者の反俗精神との共通点および相違点はどこに求められるべきであろうか。

たとえば、賈島の「三月晦日に劉評事に贈る」の詩、

三月正當三十日　　三月　正に當る三十日
風光別我苦吟身　　風光は我が苦吟の身に別れんとす
共君今夜不須睡　　君と共に今夜は睡るを須いざらん
未到曉鐘猶是春　　未だ曉鐘に到らざれば猶お是れ春

ここにはすでに詩句構成に呻吟するうちに、時の流れにも見放されそうな不安の懐述がある。かならずしも苦吟に限らず、この傾向は、詩を作ること自体がしばしば詩の中に現われることと類縁関係にある。当時の芸術意識の解明に必須の苦吟と、それを結果せしめた理由の考察は、まさに詩作および詩の鑑賞自体をまた作詩することの中に求められるべきである。

吟想舊經過　　吟想にては舊より經過す
花時奈遠何　　花時　遠きを奈何せん
別來長似見　　別れてより長に見るに似たり
春夢入關多　　春夢　關に入ること多し

（雍陶「春に舊游を懐う」）

思君一見如瓊樹　君を思い瓊樹の如きを一見せんとし
空把新詩盡日吟　空しく新詩を把りて盡日吟ず
（許渾「殷堯藩先輩に寄す」）

相知莫話詩心苦　相知には詩心の苦しきを話す莫かれ
未似前賢取得名　未だ前賢の名を取得せしに似ず
（薛能「秋日まさに滑臺を離れんとし知る所に貽る」）

風景もまた、しばしば、それが詩化されやすく、詩吟に適するという理由で、つまり風景自体の規模やその壮麗にはよらずに愛されている。杜荀鶴は「春日山居して友人に寄す」詩で歌っている。

野吟何處最相宜　野吟　何れの處ぞ最も相い宜しき
春景喧和好入詩　春景　喧和　詩に入るるに好し
高下麥苗新雨後　高下す　麥苗　新雨の後
淺深山色晚晴時　淺深の山色　晚晴の時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com